

LS 研 2026 年度研究分科会 テーマ概要

カテゴリ	No.	研究分科会テーマ
戦略 (Digital Strategy)	1	サービス利用型 IT プロジェクトにおける情報システム部門の役割と人材の研究
	2	IT プロジェクトにおける PM 役割分担の最適化戦略の研究
技術 (Digital Technology)	3	AI 技術を用いたソフトウェア開発技術および開発プロセスの高度化の研究 (クラス 1)
	4	AI 技術を用いたソフトウェア開発技術および開発プロセスの高度化の研究 (クラス 2)
	5	FAQ チャットボットの性能向上と実践評価の研究 (クラス 1)
	6	FAQ チャットボットの性能向上と実践評価の研究 (クラス 2)
	7	クラウドネイティブ環境へシフトするための各種課題対策の研究
運用 (IT Service Management)	8	運用保守業務における生成 AI を活用した人材育成モデルの研究
	9	システム運用における生成 AI を活用した運用ドキュメント自動生成・更新とレビュー支援の研究
	10	生成 AI 活用によるナレッジの即時適用の研究

注)本資料中に記述した製品・サービス名は各社の商標または登録商標です。

LS 研 2026 年度研究分科会 テーマ概要

戦略 (Digital Strategy)	No.1	サービス利用型 IT プロジェクトにおける情報システム部門の役割と人材の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 DX 実現のための IT システムは、アジャイル・内製化の他に、SaaS などを利用し作らないアプローチがある。「作らない」といっても多くの場合は何らかのカスタマイズやアドオンがあり、既存のシステムとの連携やネットワーク、認証など情報システム部門が果たすべき役割は多い。しかし、プロジェクトは事業部門主導で進むことが多く、スクラッチ開発の方法論はそのまま使えない。その結果、システム仕様が可視化されず、うやむやなまま運用を開始し、業務・システムの双方に問題が発生したり、費用が多くなることも多い。</p> <p>【課題】 サービス利用型プロジェクトにおける、適切な業務要件の実現とシステム環境の統制のために、事業部門と情報システム部門の適切な体制役割とそれぞれに求められる人材を明らかにする。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・サービス利用型 IT プロジェクトにおける問題とその影響、原因 ・原因から考えられる、解決すべきポイント ・解決のために必要な体制やスキル ・スクラッチ開発のように時間や費用がかかるプロジェクトにならないための工夫 	
具体的な研究項目(例)	<p>サービス利用型 IT プロジェクトにおける、検討すべきポイントと、それに対応できる体制の組み方と必要な人材スキルを明確にする。</p> <p><ポイントの例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベンダーコントロール ・既存及び新技術基盤でのネットワークセキュリティ及び認証、IT ガバナンス ・要求実現の保証と仕様の文書化 ・スクラッチのように「重く」しない進め方 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・SaaS・PaaS を中心とした IT サービス導入に関する基礎知識を有すること。 ・プロジェクトマネジメントの経験を有すること。 	

戦略 (Digital Strategy)	No.2	IT プロジェクトにおける PM 役割分担の最適化戦略の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 アジャイル、DevOps、クラウドネイティブ化といった IT 環境の急速な変化に伴い、従来のプロマネ(PM)業務は複雑化・広範化し、一人の PM が全てを担うことが困難になっている。これにより、PM の過負荷、役割の曖昧化、そしてプロジェクト管理の非効率化が生じ、プロジェクトの成功確率が低下するリスクがある。また、プロダクトオーナーやスクラムマスターなど新たな役割との連携不備は、責任の重複や抜け漏れを招き、チームの生産性やモチベーションを阻害している。</p> <p>【課題】 変化する IT 環境下で PM の過負荷を解消し、戦略的業務への集中を促すためには、IT プロジェクトにおける PM 役割分担の最適化戦略を確立する必要がある。そのために、PM 業務の再定義と効率的な連携を可能にする PM 支援手法を確立する必要がある。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・過去と現在の PM 業務の役割・責任範囲の比較対照表 ・現代の IT 環境における PM 業務の役割分担モデル類型と推奨ガイドライン ・PM に求められるスキルセットの変化とスキルギャップ分析結果 ・PM 業務の自動化・AI 活用による効率化の可能性と未来の PM 像に関する考察 ・PM 人材の育成とキャリアパス再構築に関する提言 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・過去と現在の PM 業務の比較分析 ・PM 業務の要素分解と再定義 ・最適な役割分担モデルの類型化と評価 ・PM 業務の自動化・AI 活用による最適化と未来展望 ・PM 人材の育成とキャリアパスの再構築 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトマネジメント経験を有すること。 ・AI 技術および業務自動化についての基礎知識を有すること。 ・システムアーキテクチャ、クラウドネイティブ技術に関し理解していることが望ましい。 	

LS 研 2026 年度研究分科会 テーマ概要

技術 (Digital Technology)	No.3 No.4	AI 技術を用いたソフトウェア開発技術および開発プロセスの高度化の研究 (クラス 1, 2)
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 現在、生成 AI によるソフトウェア開発の各工程の効率化が進展しており、その適用範囲は今後さらに拡大する見込みである。加えて AI エージェントを前提とした開発プロセスへの変革が予想される。一方で、生成 AI の出力チェックや AI エージェントの動作制御の適切な手法は、現時点では不明確な点が多い。また、統合開発環境(IDE)においても、最新技術への対応とセキュリティ確保の両立が求められている。</p> <p>【課題】 今後の技術トレンドなどを整理し、開発環境、必要スキルの変化など含めた生成 AI・AI エージェントのソフトウェア開発適用における、開発技術および開発プロセス、開発者スキル、開発環境を明らかにする必要がある。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の技術トレンド、AI 前提の開発環境の整理 ・ 生成 AI・AI エージェントによるソフトウェア開発の実践と問題点の理解 ・ 生成 AI・AI エージェントを利用した場合の、QCD 観点での特性、問題を理解 ・ 開発環境に求められるセキュリティ要件 ・ 適切と考えられるプロセスの検討及びサンプルプロジェクトでの実践 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生成 AI・AI エージェントを導入したソフトウェア開発プロセス ・ 開発プロセスを策定する場合に留意すべきチェックリスト ・ セキュリティを考慮した開発環境の推奨構成 ・ AI 時代に求められる開発者スキルリスト 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生成 AI でコードを生成した経験があること。 ・ 要件の整理や上流設計などの業務でチャット型の生成 AI を活用する経験があること。 	

技術 (Digital Technology)	No.5 No.6	FAQ チャットボットの性能向上と実践評価の研究 (クラス 1, 2)
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 FAQ チャットボットの性能向上を現場で実施する方法を研究する。RAG などの技術を使ってチャットボットの性能を向上する施策は出ているものの、入力データの選定、クリーニング、チューニングなどの各施策に対する評価が不十分であり、実際に要員を削減するまでのレベルには至っていない。</p> <p>【課題】 チャットボットの性能向上に必要な技術的な施策について、ノウハウや評価方法を明確化し、実際に現場での運用への効果を明らかにする必要がある。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ FAQ チャットボットの性能向上施策の収集・分析 ・ 入力データの選定、クリーニング、チューニング方法の検討 ・ 実際にチャットボットを運用し、性能向上施策の効果を評価・要員削減に向けたチャットボットの運用方法の提案 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャットボットの性能向上施策の立案とその評価プロセス ・ チャットボットの運用による要員削減の実践結果 	
前提スキル	特になし。	

LS 研 2026 年度研究分科会 テーマ概要

技術 (Digital Technology)	No.7	クラウドネイティブ環境へシフトするための各種課題対策の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 企業におけるクラウドサービスの利用は年々拡大している。2024 年では 80.6%の企業がクラウドサービスを全社及び一部事業所又は部門で利用している。(総務省データ) しかし企業システムの多くは、依然多くのシステムがオンプレミス環境に最適化され、クラウドネイティブ環境への移行が遅れており、アジリティの低下、コスト効率の悪化、スケーラビリティの制約といった、企業 DX 化を阻害する問題が生じている。</p> <p>【課題】 クラウドネイティブ環境へのスムーズな移行を実現し、企業システムにおけるデジタル化の浸透・拡大を目指すために、クラウド技術の組織としての知識・スキル向上、既存システムとの互換性の担保、移行コストの低減、機微データの取扱い、業務プロセス・組織文化の変革などの課題への解決策を明らかにする必要がある。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・クラウドネイティブ化の目的と価値の整理、成功・失敗事例の収集・要因分析 ・クラウドネイティブ化推進に必要なロールとスキルの調査、及び調達方法の検討 ・クラウドネイティブアーキテクチャパターンの調査・整理 ・クラウドネイティブ化検討の進め方の調査・整理 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・クラウドネイティブ化の主要な検討要素と主な検討観点 ・クラウドネイティブ化推進体制、技術者計画 ・クラウドネイティブ化の難易度評価方法・評価結果整理方法 ・クラウドネイティブ化 (アプリ・インフラ) 検討方法・検討結果整理方法 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・アプリケーション開発経験があること。 ・クラウドネイティブとは何かが説明できること。 	

運用 (IT Service Management)	No.8	運用保守業務における生成 AI を活用した人材育成モデルの研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、研究目標・方向性)	<p>【問題】 IT 運用現場では、障害対応や監視業務の負荷が高く、属人化されたノウハウに依存する傾向が強い。加えて、シニア層の退職や組織再編により、長年蓄積された暗黙知が失われるリスクが顕在化している。一方で、AIOps の進化により、ログ分析や異常検知、インシデント対応の自動化が可能となりつつある。これらの技術を活用した人材育成モデルにより、持続可能な運用体制の構築が求められている。</p> <p>【課題】 生成 AI を運用現場に適用することで、従来の運用業務において課題となっていた属人化の排除を進めるために、今後は生成 AI の活用を前提とした人材育成モデルを確立する必要がある。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ナレッジをベースとしたデータと RAG や LLM を組み合わせた運用に必要な生成 AI のスキルの整理 ・動画・音声による技術継承の効果検証と教育コンテンツの標準化 ・スキルマップ活用による育成モデルの作成 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ServiceNow などでの運用の暗黙知をナレッジとしてデータ化し、データをベースとし、AI(RAG や LLM)を組み合わせた運用に必要なスキルの研究 ・ナレッジ継承における動画・音声コンテンツの活用と理解度の比較分析 ・運用部門における、AI や RAG のスキルをベースとした人材スキルマップの検討 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・システム運用業務の経験があること。 ・システム構築・システム運用設計の業務経験があること。 	

LS 研 2026 年度研究分科会 テーマ概要

運用 (IT Service Management)	No.9	システム運用における生成 AI を活用した 運用ドキュメント自動生成・更新とレビュー支援の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、 研究目標・方向性)	<p>【問題】 運用現場では手順書や障害報告書、変更管理文書などが手動で作成・更新されており、属人化・陳腐化しやすい。また、アプリケーション変更時に運用面の検討が不十分なままカットオーバーを迎えることが多く、稼働後のトラブルにつながる問題や、監査や引継ぎが発生した際に最新のドキュメントが不足するといった問題に直面している。</p> <p>【課題】 運用に関するドキュメント変更およびレビューにおける問題解決に向けて、大きく以下の2つの領域があり、それぞれ問題解決に取り組む必要がある。</p> <p>①システム運用での障害対応・変更対応によって運用手順書・運用設計書の修正を行う際に、障害報告や変更管理文書から適切な修正箇所や内容を特定して修正し、最新版維持しなければならない。その際に、人に依存しない手法確立が必要となる。</p> <p>②法制度変更等の外部要因をきっかけにアプリケーション変更が生じた際に、アプリケーションを使用する業務への影響を特定して運用手順書・運用設計書を修正しなければならない。その際に運用設計書の自動生成やレビューで人に依存しない手法確立が必要となる。</p>	
目標とする研究成果(例)	<p>① インフラ運用に関する運用ドキュメント自動生成とレビュー支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生成 AI を活用した運用手順書の構造自動生成と障害報告書のドラフト自動作成 ・テンプレートライブラリと AI ベースのレビュー支援ツールによるレビュー工数削減 ・人間のフィードバックを通じた AI モデルの継続的な学習ループ設計 <p>②アプリケーション変更時の業務運用に関わる運用設計書自動生成とレビュー支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・変更要求に紐づく既存運用設計書の関連箇所特定と、変更の影響範囲・運用手順の可視化 ・レビュー工数を削減する AI ベースのレビュー支援ツールと、人間のフィードバックを通じた AI モデルの継続的な学習ループ設計 	
具体的な研究項目(例)	<p>① インフラ運用に関する運用ドキュメント自動生成とレビュー支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドキュメントの自動更新トリガーや、生成 AI を活用した運用ドキュメント生成・更新 PoC ・レビュー支援機能とフィードバックループの構築 <p>②アプリケーション変更時の業務運用に関わる運用設計書自動生成とレビュー支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・LLM で変更要求を解析し、アプリケーションコンポーネントや運用手順を自動特定 ・バージョン管理システム、CI・CD 実行履歴などの関連情報と連携し、変更の背景や潜在的リスク分析。また、レビュー支援機能とフィードバックループを構築 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・システム運用業務の経験があること。 ・システム構築・システム運用設計の業務経験があること。 	

LS 研 2026 年度研究分科会 テーマ概要

運用 (IT Service Management)	No.10	生成 AI 活用によるナレッジの即時適用の研究
研究内容・研究方針 (背景、現状の課題、 研究目標・方向性)	<p>【問題】 定型的な問い合わせ対応はチャットボット等による自動化が進んでいるが、インシデント対応など非定型業務では、情報の鮮度と即時性が極めて重要である。インシデントの内容を迅速に反映した対応が求められる中、従来のナレッジベースでは限界がある。</p> <p>【課題】 インシデント情報を迅速に取り込み、即時に適用可能なナレッジを AI で生成し活用する仕組みの構築が求められている。</p>	
目標とする研究成果(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・リアルタイムなインシデント情報から生成 AI が対応ナレッジを生成するモデル設計と実装 ・ナレッジの収集、更新、検証を自動化するプロセスを構築し、継続的な品質維持を可能にする運用モデルの提示 ・実証実験やシミュレーションを通じて、対応時間短縮率、FAQ 精度向上、CS スコア改善の成果指標の作成 	
具体的な研究項目(例)	<ul style="list-style-type: none"> ・発生インシデント情報と過去のナレッジを AI で分析し、即時に回答を生成する方式の検討 ・情報システム部門で発生するインシデント情報を即時に収集解析し、生成 AI によって対応ナレッジを自動生成する仕組み ・サポートデスク業務で、生成 AI の即時適用が効果的な業務領域を特定、導入条件や制約の明確化 ・対応時間、正答率、再問合せ率などを用いて、AI によるナレッジ即時適用の効果を定量的に評価する指標の策定 	
前提スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・社内サポートデスク業務の経験があること。 	